

授業動画及び演習を活用した小学校外国語教員研修
のあり方：
英語専科教員と学級担任の気付きの違いを踏まえて

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2024-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲葉, 英彦, 矢野, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000303

授業動画及び演習を活用した小学校外国語教員研修のあり方

—英語専科教員と学級担任の気付きの違いを踏まえて—

稲葉 英彦、矢野 淳

(静岡大学教育学部、静岡大学教育学部)

Incorporating video and roleplay in training elementary school teachers:

Differences among English and Homeroom Teachers

Hidehiko INABA, Jun YANO

要旨

本稿では、小学校外国語に係る教員研修に参加した英語専科教員及び学級担任の振り返り記述を整理することによって、その気付きや考えの差異を明らかにし、小学校外国語教員研修のあり方について考察することを目的とした。文部科学省(2017)によれば、中央研修を受けた英語教育推進リーダーが教員研修の講師を務め、さらにその研修に参加した受講者が、研修内容を周知することで小学校教員の授業力向上に寄与するという。また、全国の自治体が公開する「英語授業改善プラン」からは、推進リーダーによる授業動画を作成し、各地区の外国語指導力向上及び授業改善の研修の一環として活用していることが把握できる(文部科学省、2023)。中村他(2020)は、英語専科教員及び学級担任とでは、授業を参観する際に異なる気付きや視点をもつことを指摘しており、実際の振り返り記述からは、学級担任等が児童の不安感を解消し安心して言語活動に取り組める支援を重要視していることや、専科教員が技能面や内容面に関する充実した指導に向けた具体的な指導法や適切な児童への関わり方について考えを深めようとするのが示唆された。今後、専科教員と学級担任等が協働する議論や演習を研修の軸とし、学級担任及び専科教員の専門性を有機的に関連づける小学校外国語研修が求められる。

キーワード： 小学校外国語、教員研修、英語専科教員、学級担任、教師教育

1. 研究の背景

小学校外国語に関する教員研修については、教育委員会等主催の研修として、あるいは各校における校内研修の一環として多く実践されている。その研修内容について、文部科学省(2017)「小学校外国語活動・外国語ガイドブック」では、中央研修を受けた英語教育推進リーダーが講師となって進める教員研修を事例として挙げ、受講者がその研修内容を校内に周知していくことを推奨しているが、具体的な方法等については、「教室英語」「振り返りカード」等、研修内で扱う内容の例示にどどまっている。西子(2021)は、学級担任が小学校外国語研修に最も望む内容として「指導法」(87.8%)を挙げ、実際に行われている研修内容としても(74.3%)と満たしている一方で、その後続く「英語力向上」(60.5%)については、(32.6%)しか実施されておらず、受講者の求めるものと実際が乖離していると指摘している。つまり、授業内の指示ややり取りとして求められる英語を、実践的に学ぶ機会が十分に担保されていない状況にある。また、「英語力向上」に着目し、コミュニケーション活動を体験しながら進める小学校教員(学級担任)を対象とした外国語教育研修により、英語の苦手な学級担任が自信をもって指導にあたるようになった報告もされており(佐藤2020)、学級担任にとって、実際の授業で運用できる

英語の知識や技術を学ぶことが研修で求められていると考えられる。

他方、井草(2010)及び執行・宅間・カレイラ松崎(2018)が示唆するように、日頃から学級の児童に寄り添う小学校教員は、その初等教育の専門的知見を生かし、活動に参加しにくい児童に対して励まし、さらに適切な指導をすることが小学校外国語授業の展開において効果的であることから、研修においても、授業中の「学習者(児童)の不安や喜びといった心情面の理解」と、「授業を客観的に観察することを通じて、授業者の英語運用を含めた授業展開」を両輪とした学びが必要であると言えよう。学級担任に限らず、例えば中学校英語免許を保持する小学校教員や複数の学級をまたいで外国語活動・外国語の授業を担当する英語専科教員においても同様のことが必要であると推測できる。これらを踏まえると、学級担任及び専科教員による互恵的な学びが研修の要となりうる。中村・志村・佐々木・坂部(2020)は、担任教師(学級担任)と専科教員の英語授業を見る視点の違いに着目し、同一の授業を見た際に、専科教員が児童理解や専門的知識において特徴的であり、授業者の人柄や考えの背景など、広範囲で多面的な視点をもってしていると述べている。このような専科教員の視点から、学級担任は授業展開や英語運用、授業者のありよう等を学ぶことが期

待され、小学校教員に求められる英語力について、体験的に体得することが期待される。同じく専科教員も、児童の日常に寄り添う学級担任のもつ、多様な児童の心情面や気付きの可能性などについて幅広く考察することが囑望される。これらのことから、本稿では以下の視点をもって報告及び考察を行う。

(1) 授業動画及び演習を用いた研修における、小学校教員の取組や議論の様子はどのようなものか

(2) 学級担任・専科教員が協働的に学ぶ議論や演習を通して、気付きや考えにどのような違いがあるか

中村(2023)は、小学校外国語教育における教科担任制として、指導者が学級担任か担任外かという区分のみならず、多様な分類があることにふれている(表1)。文部科学省(2021)が掲げる「児童の学習内容の理解度・定着度の向上」や「複数教師(学級担任・専科教員)による多面的な児童理解」等の実現に向けて、今後の教科担任制の導入を鑑み、教科指導として専門性の高い教師の気付きや教材、さらに複数の多様な立場の教員による多面的な児童理解について校内外において共有し、質の高い議論を実践する場としての研修が求められることは明白である。

表1 教科担任制の分類

	学級担任	他学級の英語授業	他教科の担当	型
1	○	○	○	学級担任授業交換型 副教科専科型
2	○	○	-	学級担任英語専科型
3	○	-	○	学級担任通常型
4	○	-	-	-
5	-	○	○	複数教科専科型
6	-	○	-	英語専科型
7	-	-	○	複数教科専科特定クラス専従型
8	-	-	-	英語専科特定クラス専従型

(中村 2023、p.15 改)

2. 研究方法

本稿では、研修受講者の研修後の振り返り記述より、小学校教員に必要な外国語教育に係る研修のあり方を考察する。まず、小学校外国語教育の研修に必要なエッセンスとして(1)学習者(児童)の不安や喜びといった心情面の理解(2)授業者の英語運用を含めた授業展開を学ぶことをねらいとした、演習を伴う研修について報告する。次に受講者の振り返り記述を分析するとともに、英語専科及び学級担任それぞれに、有益な

学びとしてどのようなことが得られたのかを考察する。

2. 1. 実践の概要

本研修は、筆者を含む外国語教育チームが、授業改善につなげるという研修のねらいや各小学校にて外国語の授業を参観して得られた課題等を踏まえ、数回の企画会議を経て構成したものである。

英語専科教員及び学級担任それぞれの気付きや考えが互恵し、新しい視点や価値観がつけられることをねらいとして、両者が同一の授業動画を視聴、グループ内で意見交換を行ったうえで、演習を進める研修を設定した。本実践内で活用する動画は、授業者と事前に複数回の打合せを行い、このねらいが反映されるとともに、授業者の願いやよさが十分発揮されるよう配慮している。動画に関しては、筆者が作成及び編集を行い、授業者・外国語教育チームにより、ねらいや願いが反映されたものであるか、確認している。

2. 2. 対象者

本研修は2022年10月にA地区の小学校教員を対象として開催した。外国語の授業を担当、あるいは校内で推進役を務める教員1名が各校より選出され、本研修を受講した。具体的には、公立小学校に勤務する、英語科教員免許を有する英語専科教員(以下「専科教員」)(8名)及び外国語活動・外国語の授業を担当する、学級担任を含めた教員(以下「学級担任等」)

(23名)を対象とした。この学級担任等に分類される教員は、英語科教員免許を有する者は少なく、英語科教員免許を有しない者が、教育委員会が実施する所定の研修を受け、自治体独自の小学校外国語指導資格保持者として、校内による外国語教育推進役を担っている。研修は筆者1名が講師(ファシリテータ)となり、活動の指示や進行、全体意見交換の促進を行った。

なお、受講者には研修後に「どのようなことを学びましたか。」という問いに対して、自由に記述するよう依頼した。記述内容は研修内容の改善を目的として活用することを説明した。

2. 3. 研修の構成

本研修は以下のような構成で行った(表2)。ただし、研修前後の研修に関する留意事項の確認や、挨拶等は割愛している。

表2 研修の構成

(ア)導入(10分)	課題の確認
(イ)動画視聴・意見交換(40分)	グループ協議
(ウ)中間評価に関する全体協議(20分)	全体協議 課題の焦点化
(エ)演習(40分)	グループ協議
(オ)まとめ(10分)	振り返り

3. 研修内容

(1) 授業動画を視聴し、意見交換を行う。

まず、中央研修に参加した英語教育推進リーダーの小学校教員（以下、「授業者」）が授業を展開する動画を事前に準備をし、受講者で視聴した。動画には授業者と児童の発話に対して、字幕を付けた。受講者の気付きを生かし自身の授業を振り返ってほしいことを伝えることを前提に、視聴のポイントや着目点はあえてふれなかった。動画視聴の事前に授業者と打合せた段階において、授業内容や指導について特段の指示はしていないが、児童が言語活動に取り組んだ後の指導や支援について、できる限り児童の言葉や姿から、具体的な指導を行うことが望まれると共有した。その他、単元内容や児童と英語でやり取りを行う際の英語などについては、授業者に一任した。実際の授業動画では、授業者と児童が英語で巧みにやり取りをしながら授業が展開されている（表3）。

①～④の段階において、授業者が児童に英語で問いかけ、児童を巻き込みながら考えを引き出す姿が見とれた。また、児童の英語の応答に対し、“Yes! October 10! Perfect! Nice.”（①）や、“Good. Good job! Rabbits and cats!”（②）のように、児童の発話を繰り返すこと、褒める表現を用いて児童の発話を価値づけることの二つを組み合わせる指導していることがわかる。

授業者の英語による発話に関しては、英語によるやり取りを一貫しているが、言語活動の流れや文構造、言語材料等について英語で説明は一切行わず、児童同士が言語活動で取り組む具体的なやり取りの一部を再現していた。なお、授業者が日本語を意図的に使用したのは、④において学習課題「どのような表現を使ったら、very good shopkeeperになれるかな？みんなには、very good shopkeeper と customer になってほしいです。」⑤中間評価「すごいね！どこがよかった？もう1回やってみようか。できそう？」に限定された。

その後、受講者は、視聴した動画内のグループ内で印象的だった授業者や子供の具体的な姿、疑問や課題などに関するキーワードを挙げながら、受講者自身が、普段の実践で大切にしている視点を十分に生かして、意見交換を行った。以下は、受講者同士で共有された意見の一部である。

【授業のよさ】

- ・授業者が自信をもって英語を使っている。
- ・児童が授業者の英語による問いかけに、即興的に応答している。
- ・児童が教科書にない動物や文房具の名前などを言っている。
- ・授業者の英語を児童が全員理解して、活動している

ようだ。

- ・授業者が、児童の短い英語のつぶやきに反応し、よく褒めている。
- ・中間評価を必ず設定し、児童の英語に対して指導を欠かさず行っている。
- ・歌やチャンツ（表2では割愛）を言語活動と結びつけている。

【課題・議論したい点】

- ・英語表現に関する指導に偏っているのではないか。
- ・準備したものが多いが、専科ならできる。担任にはそのような時間がない。
- ・歌やチャンツ（表2では割愛）の扱いについて、曲数などが多く、活動の時間が短くなっているのではないか。
- ・中間評価において、表現（知識及び技能面）だけでなく、伝える内容や相手の反応に応じた英語（思考力・判断力・表現力等）に関して、指導をしてもよかつたのではないか。
- ・終末で交換できた文房具（シール）の数を問うているが、本来は「どのような表現を使って、よい店員・客になったかどうか」を問うべきであった。

【その他、質問】

- ・チャンツや歌の選択と言語活動との関連
- ・授業者の英語使用頻度と、児童の英語理解の程度に対する授業者の把握
- ・児童の「英語でなんといえばよいか」という質問に対する授業者の姿勢

(2) 児童への気付きを促す指導（中間評価）について意見交換

グループ内で話題となったことを共有し、さらに全体で深めるための意見交換を行った。授業者が児童との英語のやり取りを楽しむ姿や、活動を一旦止めて、特定の児童のよいあらわれを全児童と共有したり、疑問を解決したりする中間評価（表3 ③及び⑤）に関して話題が焦点化された。この際、講師（ファシリテーター）から、指導法等に関する一方的な助言はせず、受講者の発言内容を踏まえ、この後行われる演習で取り入れていくことを共有した。

表3 授業動画における授業者と児童の発話例

S:児童 T:授業者

場面	授業者及び児童の様子、発話例の抜粋
①本時の授業で大切にしたいことの確認、あ	T: Please be a good speaker and good listener. And positive and don't forget..? S: Reaction! T: 3 questions to you. First, what's the date is it today? S: October 10.

いさつ	T: <u>Yes! October 10! Perfect! Nice.</u> T: What's the day of the week is it today? S: Tuesday! T: Not Monday. OK. What alphabet? S: T! T: Yes. T...Tuesday. T: How's the weather today? S: Sunny! T: Yes. Sunny...But... S: But...? T: Cold. S: Sunny, but cold !
② Small Talk 「好きな動物は何？」	T: What's this? S: Panda! T: What's this? S: Tiger! T: What animal do you like? S: What animal do you like? T: I like tiger. S: I like tiger. T: One volunteer, come here. Let's play janken. T: How are you? S1: I'm sleepy and hungry. T: I'm very, very, very happy. Sunshine. What animal do you like ? S1: I like rabbit and cats. T: <u>Good. Good job! Rabbits and cats!</u> Next challenge with ALT?
③ Small Talk 中間評価	T: What animal do you like? S: I like tiger. T: (児童名) like what animal? S: Tiger! T: I like Tiger! (挙手を促す)
④ 言語活動 「Do you have a pen?」手本を示す	T: どんな表現を使ったら、very good shopkeeper になれるかな? みんなには、very good shopkeeper と customer になってほしいです。 ALT: Where do you want to go? T: Stationary shop. ALT: Do you have a pencil? T: Yes, I do. I have a pencil. Here you are. My special is special green memo.

⑤ 言語活動 「Do you have a pen?」中間評価	S2: Do you have a bird? S3: え? バー? S2: Bird! Bird! (鳥のジェスチャー) S3: あ、Bird! No, I don't. My special is special dog. T: すごいね! どこがよかった? S: 反応してた。リアクション! 英語で言えてた、ジェスチャー。 T: もう 1 回やってみようか。 できそう? S4: Do you have a pig? S5: Pig? Pig? No! No, I don't. My special is dinosaur.
⑥ 振り返り	T: How many items do you have? One? Two? Three?

※下線は筆者による加筆。

(3) 児童役と授業者役にわかれて、中間評価を演習グループ内において授業者(1名)、他は児童役(3~4名)となり、グループ演習を行った。全員が授業者を務め、毎回グループ内で振り返りの場を設定し、授業者に児童役からフィードバックが与えられた。演習内容は、主に以下の視点を踏まえて行われた。

- 1) 授業者と児童が英語でやり取りする
 - 2) 児童の英語による発話を価値づける
 - 3) 児童の言葉や姿から、目標や狙いに応じたよさを具体的に取り上げ、他児童と共有する
- グループ演習では、授業者と児童役が立場を替えながら、グループ内で選んだ単元を基に授業の一場面を即興的に実演した。事前にシナリオ等は用意されていないため、児童役の受講者はその場で授業者役の問いや指示に回答したり、児童役同士の言語活動に参加したりすることが求められた(表4)。

表4 グループ演習での受講者の活動例

児童役 A: What do you want for your birthday? 児童役 B: Dog. 児童役 A: Dog? ええっと、What dog? 児童役 B: Big and,... hair,hair,... many dog. 児童役 A: Nice. Do you like dogs? 児童役 B: Yes. But I don't have a dog. 児童役 A: I have two dogs. Cute dog. 授業者 : Nice! Thank you! 拍手! 今の二人、どんなこと言ってたかな。 児童役 C: 犬が欲しいって言ってた。 授業者 : どんなふうに言っていたの。 児童役 C: Big...あと、毛が長い犬。 授業者 : Bさん、もう一度言ってくれますか。 児童役 B: 毛がふわふわって言いたかった。

各グループにおける演習において、授業者役の受講者は、ねらいや習得を図る言語材料がある程度構想されているものの、児童役に冒頭から明確な意図が伝わっているわけではない。そのため、児童役は急に英語での発話と求められ対応できなかつたり、英語で適切な表現が想起できず、日本語になってしまつたりする場面もあった。この状況は、実際の授業における児童の振る舞い、心情と類似していると考えられる。

4. 結果

研修後の受講者の気付きや考えについて把握するために、アンケートを実施した。本稿では、小学校外国語教育に関する英語専科、学級担任等それぞれの気付きや考えについて考察することをねらいとし、それらに関わる振り返り記述のみを考察対象とする。

受講者の振り返り記述には、「子供（児童）」「思い」等、頻繁に出現する語彙が見られた。そこで、全記述データ（ $n = 31$ ）から特定の語群出現回数（単位：回）を見ると、「子供・子ども・児童」（78）、「授業」（49）、「中間評価」（23）等が並び、次いで「単元」（16）、「楽しい」（15）、言語活動（14）と続いた。児童（子供・子ども）に関する記述が最も多く、英語でやり取りする姿から児童の思いや考えを想像したり推測したりしている。また、授業の展開や中間評価に関する児童のようすや「自分が児童だったらどう感じるか」という視点で振り返っている記述も顕著であり、児童にとっての楽しさ、言語活動のあり方などを児童の視点で振り返る記述が多いことが明らかになった。そこで、本研修のねらいを踏まえ、専科教員及び学級担任等の気付きを類似点や相違点を生かしながら、出現回数の多い語群を基に、おおよその内容に分類した上で特徴的な記述を抽出した（表5）。下線は、次項5. 考察において特徴的かつ肝要であると判断し、引用した記述である。

表5 記述の分類と特徴的な記述例

学級担任等 ● 英語専科 ◆

分類	特徴的な記述例（抜粋）
（ア）児童理解や児童の立場としての気付き	<p>●学校行事や他教科との学習を踏まえながら横断的に活動していく内容を考えてみたいと思った。きっとそれが、<u>子供たちが聞きたくなるような、言いたくなるような場面を作っていくのだと感じた。</u></p> <p>●「～という表現を使わせたい」「～という表現を理解するようにしたい」という思いが強すぎて、「子供の中に伝えたい内容が先に</p>

	<p><u>ある（～を伝えたい）」という大切なことを忘れていたことに気づいた。</u></p> <p>●目的・場面・状況を明確にすることで、<u>子供の「〇〇したい」が生まれ、自分事として学ぶことにつながる</u>と感じた。</p> <p>◆<u>実際子供の立場になることにより、英語で表現することの難しさ、なかなか言葉が出てこないことのもどかしさを感じる</u>ことができ、<u>きっと子供たちはもっともどかしい思いで授業に取り組んでいるのだと感じた。</u></p> <p>◆<u>コミュニケーションを図る楽しさや意義を感じられるよう、単元毎に言語活動を設定しているが、その活動は子供にとって伝える必然性があつたか、ほんもののコミュニケーションが生まれてきたかという疑問。</u>子供たちは、クラスの友達か先生か ALT を相手に、<u>先生が決めた内容をやり取りしていたに過ぎない</u>かもしれない。</p> <p>◆<u>自分のオリジナルやスペシャルなこと、相手に対して“言いたい、伝えたい”と思うような言語活動の設定と単元構想づくりを改めて心がけたい。</u></p>
（イ）中間評価	<p>●<u>中間評価で励ましの言葉をかけることで、英語が苦手な子には安心感が得られる</u>ことに改めて気付いた。</p> <p>●<u>中間評価を行うことで、子どものよい現れがほかの子どもに伝わりほかの子どもにもよい現れが広がったり、わからなくて困っていることを解決することで子どもの自信につながったりするなど、子どもたちにとって大きな学びになる。</u></p> <p>●<u>授業動画には子供同士が「good speaker」「good listener」のように、言語活動中の子供の表れを子供同士が評価したり、教師が指導する時間を設け、一人一人の子供が力が身に付いた、次もやっていきたいと思えるようにしていきたい。</u></p>

	<p>●実際に演習をしてみて自分が子供達に聞かれそうな英単語をある程度予想しておいたり、今まで子供達がどの表現を習ってきたかを頭に入れておく必要があると気付いた。</p> <p>●<u>子供が見つけた友達の良さや気付きをもとに中間評価を行うこと</u>は、子供たちにとって具体的な見本の姿として真似しやすく、2回目の言語活動に生かしやすい良さがあると感じた。</p> <p>●子供の可能性の凄さを再認識した。ロールプレイをすることで、子供の立場で授業と向き合うことができ、貴重な機会となった。</p> <p>◆<u>こういう言い方を自分で考えられたね、そういう言い方もできるね、英語で反応できたねと、できているポイントを中間評価、アドバイスして子供の主体性を大事にしていけるようにしたい。</u></p> <p>◆中間評価において、言語面での指導のみならず、<u>内容面での指導も丁寧にする必要がある</u>と言語活動になる。</p>
(ウ) 外国語教育の楽しさ、伝える楽しさ	<p>◆<u>友達と様々な質問をすることで、コミュニケーションの楽しさを実感できる。</u>また、その楽しさに気付かせられるような声掛けや活動をしていきたいと思った。</p> <p>◆<u>時間内に作業が終わらなかった子供には、途中でかまわないよ、と伝えたが、その時の顔が忘れられない。</u>きっと何の達成感も楽しさも感じられなかっただろう。それで英語が楽しいと感じられるだろうか。と、後悔している。</p> <p>◆教師も子供も楽しく英語が伝わって嬉しい！わかって嬉しい！友達のことを知れて楽しい！間違えてもへっちゃら！という気持ちを子供も自分もち、前向きに取り組んでいきたい。</p>
(エ) 教科書の扱い	<p>●<u>教科書通りだと、身につけたい力には即していても子供たちの意欲や興味とはずれていることが多い</u>ため、目的意識がなかなか持たず、形式的なやりとりになってし</p>

	<p>まいがちだったが、これからは言語活動を設定する際に子供たちの興味と身につけたい力がマッチするように工夫して計画を立てていきたい。</p> <p>●<u>教科書ができてから教科書の内容をこなさなければならないという意識が強くなっていたことに加え、評価をしなければならなくなって、英語に楽しく触れる、英語を使った表現活動を楽しむという観点を落としてしまっていたように感じた。</u></p> <p>◆教科書のリスニングをやるときに、そのままやってしまったり、何度も聞いて聞き取ってみよう！としてしまったりした。<u>まずはそのイラストが何と言うのか確認するために What's this? What color?などと子供たちとやり取りした上でやってみたい。</u></p>
(オ) 単元構想と年間計画	<p>◆3、4年生の外国語活動では、言語材料ごと単元が約4時間で構成されているが、<u>その単元や言語材料を年間でマネジメントすることで、新たな授業づくりのアイデアが生まれる</u>と学んだ。</p>
(カ) 授業者の姿勢	<p>●<u>自分自身がわからないことを、オープンにして子供と一緒に調べていい、というお話はとても気持ちが軽くなった。</u></p> <p>●授業の引き出しが増えたように感じ、<u>なんだか授業したくなってきたように思っている。</u></p> <p>◆小学校では英語は楽しいという気持ちを・・・、というお話をされたときに、ハッとした。<u>添削の仕方、ぶっきらぼうではないだろうか。机間巡視(指導・支援)の中、怖い顔になっているのではないだろうか</u>と大変反省している。</p> <p>◆<u>英語が楽しい、英語が好きだと思える児童をひとりでも多く増やすために、教材研究により一層力を入れていきたい。</u></p>

※下線及び()内の言い換えは筆者による。

5. 考察

4. 結果で示した分類と特徴的な記述を踏まえ、学級担任等及び専科教員それぞれに、どのような気付き

や視点、学びがあったのか考察する。なお、特徴的かつ肝要であると判断し引用した記述を「 」で、受講者の議論中の言葉を『 』で示した。

5. 1. 児童理解や児童の立場としての気付き

記述に多く表れていたのは児童としての必然性や伝えたいと感じる心情面に関する内容であった。

【学級担任等】授業動画の視聴及び授業者と児童役に分かれて演習をしたことにより、「子供たちが聞きたくなるような」「言いたくなるような」「〇〇したい」と感じる場面設定が重要であると振り返っている。小学校外国語においては、買い物場面、身近な人物を‘My hero’として紹介する場面、など各単元が場面シラバスとして構成されている。児童にとって必然性のある魅力的な言語活動であることは、児童がどうしても伝えたいという思いを膨らませ、主体的に表現を求めていくことにもつながりうる。まさに「伝えたい内容が先にある」ということである。学級担任等が「大切なことを忘れていた」と考えるに至ったことをみれば、動画視聴、協議、演習は一貫して、児童の側に立った視点が尊重され、中心的話題となったと推測できる。

【専科教員】児童役を演じた演習等は多くの気付きをもつことに寄与したと言える。ある程度の英語知識をもつ専科教員は、児童の「英語でどう言えばよいか」という大概の質問に対応でき、使用が想定される言語材料についても把握している。そのため、一度授業で扱った内容や教えたことを児童は習得したのものとして、展開を急いでしまうことも少なくないだろう。母語ではない英語を習得する過程では、多くの誤りを経験し、段階的に長期的なスパンでその正確性を高めていくことが欠かせない。「英語で表現することの難しさ、なかなか言葉が出てこないものもどかしさを感じる」と、専科教員としての強みを生かし、知識面や技能面における具体的な指導・支援を事前に構想することができると考えられる。

5. 2. 中間評価

専科教員、学級担任等ともに、中間評価について多くの記述が見られた。授業動画において、言語活動後に授業者が「すごいね！どこがよかった？」と児童に問い、考えを引き出した後に、試行錯誤する機会を設定した点に着目した記述が散見された。

【学級担任等】この中間評価について、「英語が苦手な子には安心感が得られる」「ほかの子どもにもよい現れが広がったり、自信につながったりする」とし、中間評価が児童の英語学習における不安感の解消、自信の高まりなど、内面的な支援に有効であると考えていることがわかる。

【専科教員】「こういう言い方を自分で考えられたね、そういう言い方もできるね、英語で反応できたね」と具体的な言葉がけについて気付きが得られたこと

られている。専科教員にとって、中間評価という概念は新しいものではないものの、実際にどのように指導をするか、授業場面から学ぶ価値は十分にあると言える。また、「言語面での指導のみならず、内容面での指導も丁寧なことにすること」とあることから、このような指導はすでに行われており、そのねらいは学級担任等の考える心情面への影響とは異なり、目的に即した具体的な表現や内容面への指導であると指摘できる。

実際の演習における中間評価では、学級担任等及び専科教員も『間違ってもいいんだよ』『言えるようになるから大丈夫だよ』と児童役を安心させたり勇気づけたりする言葉が多く交わされた。また『そんな言い方もできるね』『素敵な表現を知っているね』と児童役を多様な視点で価値付けしようとする姿も見られた。

5. 3. 外国語教育の楽しさ、伝える楽しさ

【専科教員】英語専科に特徴的な記述として、外国語を学ぶことや英語で伝え合うことの楽しさが挙げられる。「友達と様々な質問をすることで、コミュニケーションの楽しさを実感」とあり、外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することにつながる。また、「時間内に作業が終わらなかった子供には、途中でかまわないよ、と伝えたが、その時の顔が忘れられない。きっと何の達成感も楽しさも感じられなかっただろう、」という記述からも、専科教員のもつ専門性を生かし、外国語教育特有の学びを求めていることがわかる。外国語教育が単に繰り返す過程を経験することではなく、児童が伝え合う中で味わうことができる達成感や充足感を重要視していると考えられる。

なお、本分類に関しては、学級担任等には特徴的な記述は見られなかったが、外国語の楽しさを感じていないわけではない。演習内において、伝わったことで実際に楽しそうな表情を浮かべたり、互いのやり取りを賞賛し合ったりする姿も多く見られた。研修としての気付きや学びとしては、児童の心情面に関する気付き等が強調されていたことが推測される。

5. 4. 教科書の扱い

学級担任の記述は、教科書全体を教材と捉え、児童の興味・関心とのつながりや扱う内容の多さについて問い直すものであった。他方、専科教員は、教科書にある特定の領域に焦点を当て、内容自体ではなく、指導法について言及している。

【学級担任等】「教科書通りだと、身につけたい力には即していても子供たちの意欲や興味とはずれていることが多いため、目的意識がなかなか持たず、形式的なやりとりになってしまいがち」や、「教科書ができてから教科書の内容をこなさなければならないという意識が強くなっていた」という記述からは、学級担任が児童の興味・関心を重要視しており、教科書の言語活動の内容や授業展開と関連づけることに困難を感じていることが推測できる。授業動画では、外国語活動

教材 Let's Try!を活用しながら、授業者が考案した独自の言語活動が実践されたことから、教科書にある言語活動を授業者が工夫する必要性を感じた可能性がある。

【専科教員】

教科書通りの授業を展開するにあたり、専科教員の記述にある「そのイラストが何と何と言うのか確認するためにWhat's this? What color?などと子供たちとやり取りした上で」が授業改善の手がかりの一つとなりうる。児童の学びに疑問が生まれた際、言語活動の内容について疑問をもつ以外に、教科書に掲載している言語活動であっても、その扱い方やアプローチを工夫することで、児童の学びに変化が生まれる可能性がある。また、この記述からは、専科教員が教科書にある問題（問いや質問）を解決させることに主眼を置く傾向があり、児童が既習事項を想起し、それらを実際に活用する場面の設定が少ないことも示唆される。

5. 5. 単元構想と年間計画

これまでの考察から、学級担任等は中間評価やその場での具体的な支援方法について言及されている。例えば、先述の5. 1. 児童理解や児童の立場としての気付きや5. 2. 中間評価にもあるように、特定の場面や瞬間における不安感や具体的な支援方法に着目する学級担任は、自分自身を感じる困難を克服あるいは即時的に授業を改善できる要素を求め、“このような場面ではどうするか” “どのように指導すれば授業が成立するか”といった議論に及ぶ傾向がある。一方、専科教員は校内での役割等を自覚したうえで、外国語教育を俯瞰し、長期的な英語学習の目的や動機、児童への影響などについて問い直す議論がされたと考えられる。

【専科教員】「その単元や言語材料を年間でマネジメントすることで、新たな授業づくりのアイデアが生まれる」という記述からは、専科教員の校内における唯一の推進役としての気付きであり、校内での年間計画作成や他の教員への指導に生かしていくことが推測される。視聴した授業動画は1時間の授業の概要版であったため、直後の意見交換においては、単元構想や年間計画に直接的に話題が及ぶことはなかった。しかし、先述の(エ)教科書の扱いに関連づけた議論を進めることで、年間を通した指導構想を立て、各単元において指導内容を明確化することが中間評価の充実にもつながるだろう。

5. 6. 授業者の姿勢

学級担任等及び専科教員の両者から、様々な授業者のありように関する気付きが見られた。

【学級担任等】「自分自身がわからないことを、オープンにして子供と一緒に調べていい、というお話はとても気持ちが軽くなった」「なんだか授業したくなってきた」という記述から、本研修が英語を専門としな

い学級担任等が自信をもって実践しようとする心情面での支援にもつながったと言える。語彙や表現が即座に発話できない等の学級担任がもつ苦手意識について、一定の理解を示すことが研修や授業づくりへの意欲の一側面として必要になっていくであろう。

【専科教員】「添削の仕方、ぶっきらぼうではないだろうか。机間巡視（指導・支援）の中、怖い顔になっているのではないだろうか。と大変反省している」とあり、これまでの自身の授業づくりを振り返り、授業観を問い直す機会につながったことがうかがえる。

“怖い顔”という表現からは、研修で扱った動画内における授業者の表情が児童の学習意欲を支えるものであったり、寄り添う支援者として適切であったりしたと捉えたことが推測できる。小学校外国語において、授業者の表情や言葉のかけ方などは、本研修内で直接話題にすることはなかったが、専科教員が学級担任等から学ぶべき視点の一つとして考えられるだろう。

5. 7. 小括

学級担任等の記述には、児童の安心感や意欲といった心情面を重要視する記述が顕著であった。また、児童とともに学ぶ姿勢などにも考えが及んでいる。一方「子どもの見取りの仕方、全員参加で子ども主体を目指す授業などいろいろな先生からの意見で学べる」と記述していた受講者もあり、専科教員と議論する場は外国語教育らしい気付きや考えについて具体的なアイデアや知見を共有することに役立ったと言える。

専科教員も、児童にとっての外国語の楽しさや言葉が出てこないもどかしさにふれる記述が見られ、児童の側に立って授業を問い直す姿があったと言える。加えて、特に中間評価や演習においては、技能面などにおいて言語材料や授業のねらいをふまえた指導のあり方について関心が高まっていたと考えられる。

6. 結語

本稿では、小学校外国語研修における専科教員及び学級担任等の気付きの違いから、研修の可能性を探るべく、両者の視点を生かした研修を行い、受講者の振り返り記述を考察した。本実践で行った研修では、専科教員及び学級担任等の両者に多様な気付きや考えが生まれ、一定の成果があったと言える。

記述内容から得られたことを整理すると、授業動画での気付きを生かした意見交換及び演習を中心とした研修において、(1)専科教員及び学級担任等ともに、児童の困り感を把握することが必要であるとしているが、とりわけ学級担任等は、児童の外国語学習に関する不安感を解消し、安心して言語活動に取り組める支援を重要視していること、(2)専科教員は、技能面や内容面に関する充実した指導に向けた具体的な指導法や適切な児童への関わり方、外国語教育を長期的なスパンで捉えた学びや価値について考えを深める傾向に

あること、(3)中間評価という児童の言葉や姿を基に行う指導においても、上記(1)(2)に対する考え方が反映されることが明らかとなった。これらの点は、受講者一人一人が日頃の授業実践の積み重ねから感じていることを基に、意見交換した内容と関連づけられた結果である。こうした異なる経験や背景をもつ受講者が同一の授業実践を基に議論し、話し合ったことをその場で実践する機会は、専科教員が1名しかいない校内研修では実現できないことから、立場の異なる複数の教員が集まる研修が貴重であることを示している。

研修内容及び振り返り記述を概観すると、小学校外国語教育の研修のあり方として、互いの気付きや考えの違いを生かした専科教員と学級担任等が協働する議論や演習により、学級担任の児童支援の側面と専科教員の外国語指導に係る専門性を有機的に関連づけることが可能であることがうかがえる。また、専科教員・学級担任が児童役となる演習では、児童の心情面等を異なる経験や背景に基づく視点で捉えようとする中で、授業の研修講師の考えに基づく一方的な講義や役割の押し付けではなく、受講者が自身の授業観や指導観自体を問いただすことが可能であることも示唆された。

一方、本実践においては、専科教員8名、学級担任等23名という偏りがあり、全グループに意図的に専科教員と学級担任等をバランスよく構成することができなかった。それを補うための全体協議も設定したが、演習における専科教員からのフィードバック、学級担任等からの気付きの共有などにおいて、十分な機会が保証されたとは言い難い。また、専科教員と学級担任等が異なる気付きや考えをもち、自身の授業実践に生かすことを踏まえると、継続的な気付きの深まりについても熟議が必要であり、一度の研修では解明が残されている。今後、専科教員や学級担任等に加え、地域の支援教員やALT等が協働する研修も実践される可能性もある。さらに多様な視点に基づく研修の可能性について、検討を重ねたい。しかしながら、本研究における成果によって、専科教員及び学級担任等、立場の異なる気付きのよさを生かした、学び続ける教員のための研修のあり方の一つを示すことができた。これは、今後の外国語教育における研修において、授業動画の作成に係る留意点、意見交換や演習の構成、協議の論点等に貢献する一助ともなりうる。今後も真に必要な研修となる、多様な小学校外国語研修のあり方を追求していきたい。

引用・参考文献

- 青山之典・兼安章子・入江誠剛・納富恵子(2020)「動画を活用した授業分析演習とその効果」、『福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報』、第10号、pp.1-11。
井草玲子(2010)「より良い外国語活動の指導のできる

小学校教員の育成を目指して一学級担任の役割と今後の課題一」、『東京福祉大学・大学院紀要』第1巻、pp.189-195。

佐藤裕子(2020)「小学校外国語教科化に受けての校内研修体制—学級担任の不安軽減に焦点を当てて—」、『小学校英語教育学会誌』20巻01号、pp.115-130。

執行智子・宅間雅哉・カレイラ松崎順子(2018)「小学校英語の現職教員研修—何が必要なのか—」、『言語学習と教育言語学』、pp.19-28。

中村香恵子・志村昭暢・佐々木智之・坂部俊行(2020)「担任教師と専科教員の小学校英語授業を見る視点の違い」、『北海道英語教育学会紀要』第19巻、pp.84-99。

中村典生(2023)「小学校英語教育における教科担任制について」、『教室の窓』Vol.68、東京書籍、pp.14-15。

西子みどり(2021)「日本の小学校の英語に関する現職教員研修についての考察—韓国の現職教員研修の実践と教員の基本調査の結果を踏まえて—」、『中部地区英語教育学会』50巻、pp.129-136。

文部科学省(2017)「小学校外国語活動・外国語ガイドブック」

文部科学省(2021)「義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について(報告)」

文部科学省(2023)「令和5年度英語授業改善プラン」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1418086_00007.htm (2024年2月10日取得)